

G-53 予後に対する抗癌化学療法中の発熱の影響 - 非小細胞肺癌患者における検討 -

久留米大学第一内科

○力丸 徹、一木昌郎、大久保洋、合原るみ、田中泰之、大泉耕太郎

【背景】我々は以前、肺癌治療中における発熱が患者の予後に影響を与えることを報告した(Support Care Cancer 6)。しかし、小細胞肺癌と非小細胞肺癌においてはその性質が異なり、別々に検討する必要がある。今回は非小細胞肺癌に限って検討した。【目的】化学療法中の発熱が予後に与える影響を非小細胞肺癌において検討する。【対象および方法】対象は1984年から1997年の間に当院に入院し、抗癌化学療法を施行した非小細胞肺癌患者303例。発熱患者138例(A群)と非発熱患者165例(B群)の予後をRetrospective に比較検討、多変量解析を用いて発熱と他の予後因子との関係を調べた。【結果】有意な予後因子はStage, Responce, PS および発熱であった。MSTは有意にA群が悪かった(A群203日、B群366日、 $P<.0001$)。化学療法回数はA群2.1コース、B群2.3コースと差はわずかであった。3ヶ月以内の短期死亡例を除いて検討したが、結果は発熱のRisk Ratio (RR) は2.089から2.125と増加したのに対しPSのRRは1.533から1.189に減少した。【考察】PSが短期の予後に大きな影響を与えたのに対し、発熱はより長期の予後に影響を与えていると思われる。感染症はangiogenesisに影響を与えるという報告もあり、今回の結果から腫瘍の増殖に対し感染症(発熱)が影響を与えている可能性も否定できないと思われる。

G-55 pT3(p3)原発性肺癌症例の検討

大分医科大学第二外科¹、大分県厚生連鶴見病院胸部外科²、大分市医師会立アルメイダ病院胸部外科³

三浦 隆¹、中城正夫¹、在永光行¹、河野洋三¹、庄司剛¹、田中康一²、安江和彦²、一万田充俊³、内田雄三¹

【目的】pT3(p3)原発性非小細胞肺癌症例の外科治療成績を臨床的に検討する。

【対象】1984年から98年までに外科的切除された原発性肺癌657例のうち、pT3(p3)症例40例を対象とした。

【結果】男性32例、女性8例。年齢は37~79歳。最大腫瘍径18~115mm。術式は、全摘3例、二葉切1例、葉切33例、部切3例。組織型は、腺癌19例、扁平上皮癌16例、腺扁平上皮癌3例、大細胞癌2例。N因子は、No 20例、N1 10例、N2 10例。pT3因子は、胸壁浸潤31例、葉間浸潤6例、心臓または横隔膜浸潤5例。全症例の5年生存率は21.3%。組織型別では、腺癌0%、扁平上皮癌47.1%。N因子別では、No 35.6%、N1 25.0%、N2 0%。浸潤臓器別では、胸壁浸潤19.4%、葉間浸潤0%、心臓または横隔膜浸潤33.3%。No症例のみについて検討すると、腺癌(9例)0%、扁平上皮癌(9例)62.5%。胸壁浸潤(16例)34.8%、葉間浸潤(2例)50.0%、心臓または横隔膜浸潤(2例)0%。

【結語】pT3(p3)肺癌症例の予後は必ずしも良好ではなく、特に腺癌症例では、N因子、pT3因子に関わらず不良であった。しかし、扁平上皮癌症例またはNo症例では、外科的切除により比較的良好な予後が期待できると考えられる。

G-54 肺非小細胞癌の予後因子の男女差について 長崎大学第二内科¹、放射線影響研究所²

○早田 宏¹、早田みどり²、中村洋一¹、笠井 尚¹、岡 三喜男¹、河野 茂¹

【目的】肺非小細胞癌での性、年齢、組織型、病期の予後への影響を明らかにする。【対象・方法】1986-93年にがん登録(組織診率78%、DCO率12%)された肺非小細胞癌(男性2,344例、女性948例)を対象とし、単変量解析は保険数理法・Log-rank検定、多変量解析はCox比例ハザードモデルを用いた。【結果】男性の10年生存率は14%、女性は22%で男性に対するハザード比は0.79であった。男性では、年齢が進むほど予後は不良(70-79歳に対するハザード比は20-44歳0.44、45-59歳0.64、60-69歳0.83)であったが、組織型による差はなかった。女性では10年生存率は20-44歳15%、45-59歳35%、60-69歳26%、70-79歳14%で、腺癌24%、扁平上皮癌16%、大細胞癌9%であった。70-79歳に対するハザード比は20-44歳1.03、45-59歳0.56、60-69歳0.70で、腺癌に対するハザード比は、扁平上皮癌1.23、大細胞癌1.58であった。【結論】女性非小細胞癌では45歳未満70歳以上と非腺癌は予後不良因子であり、女性を対象とした臨床研究では層別化の際に注意が必要である。

G-56 原発性肺癌開胸時胸腔内洗浄細胞診の予後に関する検討

三井記念病院呼吸器センター外科

○葛城直哉、坂口浩三、池田晋悟、川野亮二、横田俊也、郡 隆之、柳田正志、羽田圓城

【目的】開胸時胸水や胸膜播種を認めず、胸腔内洗浄細胞診陽性となった原発性肺癌手術症例の予後に関して検討する。

【対象と方法】対象は1991年から1994年までに当院で手術した原発性肺癌のうち、DOE0で広範な癒着を認めず、開胸直後と閉胸時に50ml生理食塩水で胸腔内洗浄し細胞診を行った168例。【結果】全症例の内訳は男性122例、女性46例。年齢は32才から82才(平均63才)。組織型はAd92例、Sq65例、AdSq2例、LA5例、SM4例。病理病期はIA39例、IB30例、IIA4例、IIB20例、IIIA33例、IIIB38例、IV4例。P因子はP091例、P122例、P221例、P334例。観察期間は1ヶ月から100ヶ月で平均44ヶ月であった。洗浄細胞診での陽性率は、

	開胸時陽性	開胸時陰性
閉胸時陽性	7/168(4.2%) -1群	12/168(7.1%) -3群
閉胸時陰性	3/168(1.8%) -2群	146/168(86.9%) -4群

各群の5年生存率と平均生存期間と再発率は、

	5年生存率	平均生存期間	局所再発	遠隔転移	無再発
1群	14.3%	30.1ヶ月	1/7	3/7	3/7
2群	0%	17.7ヶ月	2/4	1/4	1/4
3群	8.3%	22.8ヶ月	5/17	8/17	4/17
4群	47.8%	53.1ヶ月	31/163	50/163	82/163

【結語】開胸時のみならず、閉胸時細胞診陽性群も予後が悪い。陽性群では局所再発よりも遠隔転移する頻度が高い。